ファミリー

小桜ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファミリー

【Ｎコード】
Ｎ２０４２Ｋ

【作者名】
小桜ひなた

【あらすじ】
母親の再婚話に反発する少女の話です。
といっても、重かったり、暗かったりはしないと思います。
明るさや爽やかさが残る物語になるよう意識して書きました。
ただ、勢い＆気まぐれで書いたものなので、期待はしないでください・・・暇つぶしにもならなかったら申し訳ない。
長さとしては短編に入ると思うのですが、読みにくいといけないので複数話に分けました。

1

軽快なメロディが短く鳴って消えた。
「ん、メールだ」
上着のポケットから携帯を出し、画面を見つめるあたしの顔を、ヒロとシホがニヤニヤしながら観察している。
「……お母さんだよ。何か甘いもの食べたいから買って帰ろうと思うんだけど、豆大福とケーキ、どっちがいい？　だって」
『豆大福でよろしく♪』と親指で素早く打ちながら、あたしは言った。ヒロは「なーんだ」とガッカリし、シホは「だと思った」とやっぱりガッカリしている。
「しっかし、お母さんがメル友ってスゴイよね」
馬鹿にした風でも、呆れた風でもなく、本当にそのまんまの意味という感じでヒロが言った。
「ほんと、アキラはお母さんとめっちゃ仲イイよね。羨ましー」
シホの言葉に、ヒロが「うんうん」と頷いている。
「うちなんか、ほとんど話しないもんなー」
ヒロが言うと、
「うちは普通にするけど、メールはしないなぁ、よっぽどの用がない限り」
シホも言う。
「うちはずっとお母さんと二人だけだから、自然と仲良くもなるって。ヒロんちはお姉ちゃんも妹もいるじゃん？　仲良いし。シホんちは、お父さんとお母さんラブラブじゃん？」
「ちょ、その言い方キモいからやめてー」
まんざら嫌でもなさそうに、シホが言う。
両親が仲良しというのは、何より幸せなことだとあたしは思う。想像に過ぎないけど。
あたしの父親は、あたしが小三の時に家を出て行った。会社の若

い女の子と不倫した挙句、子供ができたらしい。あたしは、大してショックでもなかったし、悲しくもなかった気がする。だって、それまでも父親にかまってもらったことなんてなかったし、優しい言葉をかけてもらったことすらなかったから。

戸籍では家族だったけど、心の繋がりなんてこれっぽっちもなかった。その後どこでどうしているのかなんて知らないし、特に知りたいとも思わない。あたしにとっての父親は、二度と会うこともないただの“ろくでなし”だ。

あたしは今、幸せだ。心からそう言える。大好きなお母さんと、毎日仲良く暮らしてる。第一希望の高校にも無事受かってこうして通っているし、あとは希望の大学に入って、管理栄養士の資格をとって、病院に勤めて、お母さんに安心してもらいたい。それがあたしの夢、ううん、目標だ。

できれば、もう少し広いアパート、いや、マンションに引っ越したい。それで、年に一度はお母さんと二人で旅行するの。いつかは海外にも行ってみたいな。

そんなあたしの人生設計の中に、想定外の人物たちが割り込んできたのは、それから間もなくのことだった。

2

「……どうしても会わなくちゃダメ？」
夕食後、お母さんはあたしに「会って欲しい人がいるの」と切り出した。その顔はどう見ても、恋する女のものだった。それが何だかとても嫌で、あたしはそんな返事をしたのだった。
「駄目ってことはないけど、瑛（あきら）には知ってて欲しいから……お母さんだって、瑛の彼とは仲良くしたいし」
「そんなもん、いたことないもん……」
言ってちょっと惨めになった。
訊いてもいないのに、お母さんは“彼氏”のことを話し始めた。お母さんから“彼氏”の話を聞くのは初めてだったし、ずっとそんな人はいなかったとあたしは信じている。
きっかけは同窓会――迷っていたお母さんに、「行ってきなよ。きっと楽しいよ」とあたしが勧めた、二ヶ月前のあの同窓会。２５年振りに再会した二人は、当時の思い出話に大いに花を咲かせ、お母さんは思わず口走ってしまったのだと言う。
実は三年間、ずっと中津川くんのことが好きだったのよ――と。
すると、中津川くんはたいそう驚いて、実は僕もそうだったんだ、なんて馬鹿だったんだ――と激しく後悔し始めたらしい。
中津川くんは２３歳で結婚し、一男一女をもうけたが、４年前に奥さんを事故で亡くしたそうだ。
「中津川くんの息子さん、瑛と同じ高校なのよ。すごい偶然だと思わない？」
瞳をキラキラさせて、お母さんが言った。
……中津川……それって、まさか……。
「三年生でね、バスケ部の部長さんだったらしいけど、瑛、知ってる？」
「知らない人なんていないんじゃないかな……」

あたしは呟きながら、中津川慶太の姿を思い浮かべた。
あたしは特に興味ないけど、間違いなく、うちの学校で一番のイケメンだ。学園祭のミスターコンテストで、三年連続優勝したらしい。今年はあたしのささやかな一票もカウントされてるはずだけど。だって、他の候補者よりは断然良かったから。
ヒロやシホなら、ううん、あたし以外の女子なら、ここは狂喜乱舞するところなんだろうか。母親の彼氏の息子が、学校一のモテ男だってことに。
「そうなの？　それってもちろん、良い意味で有名ってことよね？」
「超イケメン。背高いし、脚長いし、顔キレイだし、バスケ上手いし……性格もイイらしいよ、知らないけど」
「うんうん、中津川くんもそうだったぁ」
女子高生の顔に戻って、お母さんが言った。
「あ、バスケじゃなくて、野球だったんだけどね。お母さん、いっつも放課後金網のところで、練習する中津川くんのこと見てたんだ。試合の応援も行ったなぁ。あの頃、中津川くんの気持ち知ってたら、勇気出してもっと話しかけたのに」
「……今いっぱい喋ってるんでしょ？　だったらいいじゃん」
自分でも大人気ないと思ったけど、何だかイライラして、あたしはぶっきらぼうにそう言った。
お母さんのこんな顔、今まで見たことない。お母さんにこんな少女みたいな顔をさせるそのおじさん――今お母さんがうっとりと思い出しているのは高校生の少年だろうけど――を、あたしは少し見てやりたくなった。
「……別に、会ってもいいけど」
あたしが言うと、「本当！？」とお母さんは喜んだ。そうして約2週間後、あたしはお母さんの彼氏と会うことになった。

3

まさか、中津川慶太が現れるとは思っていなかった。
父親の彼女とその娘に会うために、高三男子がわざわざやって来るなんて思っていなかったのだ。
中津川慶太は、濃紺のスーツにネクタイ姿だった。あたしも、この日のためにお母さんが用意した、お嬢様風の紺と白のワンピースなんて似合わないものを着ている。
何だか妙に緊張してきてしまった。お母さんの彼氏をチェックするどころか、床ばかり見つめてしまう。
その緊張をほぐしたのは、中津川慶太の後ろからひょっこり現れた女の子だった。妹がいるのは聞いていたけど、こんな小さな女の子だったなんて。
女の子は、大きな瞳で、あたしの顔をじーっと見つめていた。あたしは子供が苦手だ。こんな時、普通はニッコリ笑ってあげるのだろうが、顔が強張って上手く笑えない。だからあたしも、女の子の顔をただじっと見つめ返した。
女の子は少し怯えたように、中津川慶太の背後に隠れてしまった。うーん、やっぱり子供は苦手だ。
簡単な紹介を済ませ、あたしたちはホテルのロビーからレストランへと移動した。
座席の奥、窓際にあたしが座り、その隣にお母さんが座る。あたしの真ん前には女の子。相変わらず、あたしのことをじっと見つめている。何だか心の中まで見透かされそうだ。
「ごめんね、瑛ちゃん。愛梨は人見知りが激しくて」
お母さんの彼氏が言う。“瑛ちゃん”なんて馴れ馴れしく呼ばれたことに、あたしはちょっとムッとしてしまった。
「まだ小さいんだもの、当然よ。瑛なんて、もう大分お姉ちゃんなのに、人見知りで困るわ」

お母さんが笑うと、中津川慶太がフッと鼻で笑った。馬鹿にしてる。明らかに馬鹿にしてる。なんかものすごく悔しい。
お母さんの彼氏は、あたしに気を使ってやたらと話題を振ってくれるけど、はっきり言ってありがた迷惑だ。あたしは、「はい」とか「いいえ」とか簡単な返事しかできなくて、その度に何となく場が白けてしまっていた。
中津川慶太は、積極的に会話に加わっている。社交的なのか、世渡り上手なのか、正直ちょっと羨ましい。
「愛梨、こっち向いて」
中津川慶太に言われると、愛梨ちゃんは素直に顔を向けた。パフェのアイスと生クリームが、口の周りにベッタリとついている。中津川慶太は紙ナプキンで、優しくそれを拭き取ってやっている。
「はい、終わり」
「ありがと、にーに」
愛梨ちゃんが顔をクシャクシャにして笑った。可愛い……なんて子供に対して思ったのは、初めてかもしれない。
だけど、あたしの視線に気づいた愛梨ちゃんは、またすぐに真顔に戻ってしまった。まるで怪しい人を見るような目つきで、あたしのことを観察している。あたしは頑張って笑顔を作ってみた。愛梨ちゃんはちょっときょとんとした顔になり、その隣の中津川慶太がまた鼻で笑った。
ええ、ええ、どうせ引きつったブッサイクな変な笑顔だったんでしょうよ。あんたはいいわよね、美形な上に、自然で爽やかな笑顔が作れてさ。
「……アゴ」
中津川慶太があたしの顔をまっすぐに見て言った。
「アゴにご飯粒ついてる。しかも三つ」
そう言って、プッと笑う。あたしは慌てて紙ナプキンを取り、アゴを拭いた。恥ずかしさで顔が熱い。ちっちゃい子と変わらないじゃん、あたし！！

ふいに愛梨ちゃんを見ると、はにかんだように笑っていた。それを見て、あたしも自然に笑顔になる。
それをきっかけに急速に仲良くなった――なんてことは、残念ながらなかった。だってあたしは極度の人見知り。仲良くなるにはそれなりの時間が必要なの。たとえ相手がちっちゃい女の子でも。
それに、やっぱりあたしはどこかで面白くなかったんだ。お母さんが“女の顔”になってしまっていること。お母さんは、お母さんでいて欲しいから。今までみたいに、あたしだけを見ていて欲しかったから。

「それで、どう思った？　中津川くんのこと」
二人で帰る途中、お母さんがそう訊いてきた。それってもちろん、父親の方のことだよね？　なんて心の中で呟きながら、いろいろと思い出してみる。
想像してたよりは、かっこよくはなかったな。中津川慶太も愛梨ちゃんも、きっとお母さん似なんだ。清潔感はあったし、よく笑う、優しそうな人だったけど。
「……イイ人なんだろうな、って思ったよ」
「そう？　気に入った？」
「……別に、あたしが気に入るか気に入らないかなんて、どっちでもよくない？　付き合うのはお母さんなんだし」
あたしの言葉に、お母さんは何故か黙り込んでしまった。ちょっと冷たかったかな？　気に入った、って、嘘でもいいから言えば良かった？
そりゃ、あの人が、隣近所のおじさんだったり、友達のお父さんだったり、学校の先生だったりしたら、好感持ってたかもしれないよ？　だけど、お母さんの彼氏なんだもん、父親が娘の彼氏を嫌うのと同じで、あたしだって好きになんてなれないよ。
「……再婚したいなって思ってるの」
突然のそんな言葉に、あたしは口をポカンと開けたまま立ち尽く

した。
「慶太くんはね、推薦で大学決まってて、来年からは寮に入るのね。だから、一緒に暮らすのはその後、お母さんと瑛と、中津川くんと愛梨ちゃんと、四人で――」
「勝手に決めないでよ……」
「瑛……」
「あたしは嫌！！　嫌に決まってんじゃん！！　なんで他人となんか暮らさなきゃなんないの！？」
　思わず言ってしまって後悔する。嫌なのは正直な気持ちだけど、こんな風に乱暴に怒鳴らないで、ちゃんと話すべきなのに。いつもそうだ。口は災いの元――その言葉は、きっとあたしを戒めるためにある。
「……うん、そうだよね、ごめんね、突然勝手なこと言って……」
　お母さんが悲しそうに笑う。怒ってくれればいいのに……子供のくせに生意気な口きくんじゃない、って、叩いてくれたっていいのに……いつもはそうしてきたじゃん……。
　なんだか急に、お母さんが遠くに行ってしまったような気がした。それからあたしたちは、一言も口をきかなかった。

4

あれから1週間以上、お母さんとは必要なこと以外口をきいていない。お母さんはどこか遠慮しているし、あたしは素直になれず、常に不機嫌な態度をとってしまう。

だって、結局は再婚話に戻るわけでしょ？　前みたいに、仲良しに戻ったら。それで、あたしは認めざるをえないんだ。反対し続けながら仲良くするなんて、できっこないんだから。

……中津川慶太は、知っているのだろうか。知ってるんだろうな。お父さんと仲良さそうだったし。それで、賛成したのかな……反対する理由はないもんね。お母さん美人だし。優しいし。あれで不満があるなんて言ったら、それこそ怒っちゃうよ。

……って、別にあたし、中津川慶太のお父さんに不満があるわけじゃないんだっけ……誰が相手でも嫌なんだっけ……中津川慶太も、そうなのかな……。

「あれれ～？　誰を見つめているのかな？」

体育座りをしているあたしの視界を遮るように、ヒロの顔がにゅうっと現れた。

「なーんだ。いっつも話に乗ってこないから、興味ないのかと思ってたけど……」

シホがニヤニヤしながら言う。

「べ、別に、あたしは……」

「いいのいいの。そりゃあ見ちゃうでしょ。サッカーだもん。バスケの王子様が、今日だけはサッカーの王子様なんだもん」

ヒロがうっとりしながら見つめる先には、サッカーボールと戯れている中津川慶太の姿がある。

今日は年に一度の球技大会で、運動部に入っている人は、自分の部活と同じ種目には出ちゃいけないことになっている。引退した三年生もだ。

ちなみに帰宅部のあたしは、唯一得意な卓球を選んだものの、地味に初戦で敗退し、暇を持て余しているところ。
同じく帰宅部のヒロとシホは、帰宅部にも関わらず運動神経抜群で、この後バレーの試合に出ることになっている。もちろん、あたしは応援を頑張るつもりだ。
「あぁん、もっと見てたいけど、そろそろ行かなきゃ……」
心底残念そうに、ヒロが言った。
「アキラはいいのよ、ここで王子様を見つめてても」
「だ、だから！！　そんなんじゃないって……あたし、ヒロとシホの応援するんだから！！　置いてかないでよ～」
ヒロもシホも、明らかに疑っている。ほんとに、ほんとーに、そういう目で中津川慶太を見つめたことなんて一度もないんだから！！
「ま、いいけどね。どうせあたしらには高嶺の花だし」
「そうそう、本気で好きになったら、辛いだけだしね」
しみじみと言って、二人は同時に溜め息を吐いた。
「せめて、一度でいいから喋ってみたーい」
「ほんと、同じクラスの人たちが羨ましー」
「そうだよ、隣の席だったらどうする？　ドキドキしちゃって授業どころじゃねー」
「後ろの席良くない？　背中見つめ放題！！」
「後頭部もね！！」
「キャーッ。でもでも、突然振り向いたらどうする？　めっちゃきょどるよね！！」
「きょどるきょどる！！　ね、プリントとかまわってきたらどうする！？」
妄想話で盛り上がる二人を見ながら、あたしはこの前の日曜日のことは口が裂けても言うまいと固く心に誓った。もし知られたら、どんなに恨まれるかわからない。
その日の夜、お風呂から上がったあたしは、お母さんが誰かと電

話で話していることに気づいた。相手はどうやら高校の同級生らしい。

狭いアパートだから、聞くつもりはなくても聞こえてしまうのだ。それでもやっぱり、盗み聞きのような気がして、あたしはそそくさと自分の部屋に行こうとした。

だけどその瞬間、お母さんの口から出た言葉に、あたしの足は金縛りにあったみたいに動かなくなってしまった。

「そうよね……もしあの時中津川くんに告白してたら、私の人生、全然違うものになってたのよねぇ……」

お母さんの楽しげな笑い声が、遠くに聞こえた。部屋に戻ると、あたしは泣いた。

悲しいのか、悔しいのか、涙が止まらない。だって、お母さんは後悔してるんだ。お母さんの人生は、あの“ろくでなし”との結婚は、幸せなものじゃなかった。お母さんは、別の人生を選べば良かったと思ってる。それって……それって、あたしがいないってことだよね？

あたしのいない人生でも、お母さんはいいってことだよね？　その方が良かったってことなの？

中津川くんと結婚して、あたしじゃない子供を産んで……そっちの人生の方が良かった、って、お母さん、そう思ってるの？

いつの間にか眠ってしまうまで、あたしは何時間も泣き続けていた。

5

「柴原瑛」
突然フルネームで呼び捨てにされ、あたしは半ば混乱した頭で振り向いた。
振り向いて、そこに立っている人の姿を見て、もっと混乱した。
「なか……」
中津川慶太、とこちらも呼び捨てしそうになって、慌てて口を閉じる。
「随分ガキっぽいことしてるんだな」
「……は？」
「無視してるんだろ？　お袋さんのこと」
「お袋さんて……」
笑うところじゃないのはわかってるけど、思わず吹き出しそうになる。っていうか、話したんだ、お母さん……きっと何でも話してるんだね。
「お前の気持ち、わからないわけじゃない。いや、やっぱわかんないんだけど……おれ、男だし。けど、少しはお袋さんの気持ちも考えてやったらどうなんだ？」
なんでそんなに偉そうなの？　先輩だから？　男だから？　物分りがいいから？　イケメンだから？　モテモテの人気者だから！？
なんだかあたしは無性に腹が立ってきた。
「……人の家のことに口出ししないでもらえます？」
「お前の家だけの問題じゃないだろ？　お前だけなんだからな、反対してるの」
あ、そう。やっぱり物分りのイイ人なんですね。その物分りの良さで、あたしの複雑な心も少しは思いやってほしいんですけど！！
「……あんたんちのことなんて知らない。あんたは別に一緒に住むわけじゃないんでしょ？　あたしはね、ずっと、ずーっと、お母さ

んと二人だけで暮らしてきたの！！　これからもそのつもりだったの！！　なのに、なのに……」
　人前で泣くのは絶対嫌なのに、あたしの目からは勝手に涙がボロボロと零れていく。
「幸せだったのに……あたしは、お母さんがいれば、それで良かったのに……お母さんは、そうじゃなかった……あたしのことなんて……」
　そうだ……邪魔なのは、あたし……あんなろくでなしのサイテー男の血を引くあたし……あたしさえいなければ、みんな幸せになれるんだ……。
「落ち着け……」
　中津川慶太が、手を伸ばしてきた。その手を思いきり叩いて拒絶し、その目を思いきり睨みつけてやった。八つ当たりだ。わかってる。あたしは、よりにもよって、この人に甘えてる。
　憤然と去るあたしを、中津川慶太は呼び止めも追いかけもしなかった。

「なんであたしだけじゃダメなの……あたしと二人じゃ嫌なの……」
　辺りはすっかり暗くなってしまっていたけど、あたしは家に帰る気にはなれなかった。
　ただ街中をウロウロしてるだけ。もう随分前から、お腹がグーグー鳴っている。
　ヒロもシホもバイト中のはずだ。あたしもバイトしよっかな……うん、そうだ、そうしよう。そうすれば、家にいなくて済むし。お金貯めれば、家を出て行けるかもしれないし。
　そんなことを考えていたら、また涙がじわじわと溢れてきた。
「……何やってんだ馬鹿」
　滲んだ視界の中に、中津川慶太の姿があった。なんだかものすごく怒っている……みたい。
「お前、こんなに遅くなったことないんだろ？　お袋さん、泣きそ

うな声で電話してきたぞ。携帯も繋がらないし、誰かにさらわれたんじゃないかって。だから、おれと親父で急いでお前んち行った」
家出だとは思わないところがお母さんらしくて、あたしはなんだかおかしくなった。
「笑いごとじゃないだろ！！」
怒鳴られて、今度は涙がボロボロと零れる。
「……とにかく、電話するから。逃げんなよ」
中津川慶太はあたしを睨みつけたまま、携帯を取り出した。
「慶太ですけど、瑛ちゃん、見つけました……はい、元気です……って、逃げんなって言ったろーが！！」
中津川慶太は携帯をポケットにしまいながら、あたしの後を追いかけてきた。当然あっさりと、あたしは捕まってしまった。
「……帰る」
「は？」
「一人で帰る！！　だから離せ！！」
中津川慶太に掴まれた腕を、あたしはブンブンと振り回した。
「信用できるか！！　お前はおれが家まで連れて行く！！　引きずってったっていいんだぞ！！」
「……で？　明日からはどうすんの？　ずっと監視でもするつもり？　バッカじゃないの？」
「馬鹿はお前だろーが。あんないいお袋さん悲しませて、何がしたいんだよ！！」
「……いない方がいいの……」
「何？」
「あたしはいない方がいいの！！　あたしは邪魔なの！！　あたしがいなきゃ、あんたたちだって嬉しいでしょ！？」
「……甘ったれんな」
ズバリそう言われて、あたしは何も言い返せなくなった。
急に戦闘意欲をなくしたあたしを、中津川慶太は引っ張っていく。最初は痛いほどだった腕を掴む力が、少しずつ弛んでいった。それ

でも離す気はないらしい。
あたしはなんだか無性におかしくなって、クスクスと笑い出した。
「……何がおかしい」
「だって……あたし、連行されてるみたい」
「あながち間違いでもないんじゃないか？」
「それに……」
「何？」
「……なんでもない」
「何だよ。言いかけたら最後まで言えよな」
こんなところ、学校の誰かに見られたら、どんな噂が立つんだろ……そう思ったら、おかしいやら恐ろしいやらで。
「あたし、リンチされるのは嫌だなぁ……」
「は？　誰がそんなことするかよ。人を何だと思ってんだよ」
あなたのことじゃなくて。あなたの熱狂的なファンの子たちのことだってば。
「……ひとつだけ誉めてやるよ」
「なんのこと？」
「お前いつも、六時前には家に帰ってんだってな。門限があるわけでもないのに」
「……暗くなると、お母さん心配するから……」
「今日は、心配かけたかったわけか……典型的な甘ったれだな」
「うるさい」
「……あのさ、いつもそんな攻撃的な性格なわけ？　それとも、おれが嫌いだから？」
その質問に、あたしは答えることができなかった。
中津川慶太にしたように、誰かに乱暴な言葉をぶつけたことなんて一度もないし、ヒステリックに泣き喚いたことだってない。
かといって、中津川慶太のことが嫌いなのかというと、まったくそんなことはないわけで……結局のところ、何故か甘えてしまっただけなのだと思う。

だけど、「つい甘えちゃいました。ごめんなさい」なんて言えるわけがない。

「……答えたくなきゃいいけど」

中津川慶太は溜め息混じりにそう言った。

アパートの前の道路に、お母さんの姿が見えた。今にも泣きそうな顔で、あたしの名前を呼び、それきり何も言わなかった。

中津川慶太が帰った後、あたしは「ごめんなさい」と言った。お母さんは微笑むと、黙ってあたしの背中を優しく撫でてくれた。

台所のテーブルの上には、あたしの分の夕食がラップされてあった。お母さんはヤカンに水を入れてコンロにかけ、お風呂にお湯をはりにいった。

また涙が出てきてしまった。あたしの涙腺は、どうにかなってしまったのかもしれない。

6

「柴原瑛」

翌日、中津川慶太がまたあたしをフルネームで呼んだ。そういえば、お母さんに電話する時、「瑛ちゃん」なんて呼んでいたっけ……あたしはブルッと身体を震わせた。

「……あの、学校で声かけてくるの、やめてくれます？」

それがあたしにとってどんなにリスキーなことなのか、この人は全然わかってない。

「じゃあ、どこで声かけりゃいいんだよ。わざわざお前んちに行けってか？」

「……何か御用でしょうか？」

「何だよその言い草……お前みたいな性格の悪い女、初めて見たわ」

あたしはムッとしたけど、当たってるだけに言い返せない。だけど、あたしの性格の悪さは、あんたといる時限定だから！！

っていうか、あんたもそんなに性格良くないよね？　誰よ、性格イイとか言ってんの。それとも、あたしにだけ冷たいってこと？

「……今度の日曜、愛梨の運動会なんだ。お袋さん来てくれるみたいだけど、お前は来てくれんのかなと思って」

なんであたしが……そんな話、聞いてないし……って、話さないんだから当然か。結局あの後も、お母さんとはまともに口をきいていない。このまま永遠にギクシャクしたままなんじゃないかとさえ思う。

「まだ無視してんのか」

呆れたように、中津川慶太が言った。

「昨日のことでわかったろ。お袋さんは、お前のこと大切に思ってる。じゃなきゃ、あんなに心配するか」

「……わかってる……そんなの、わかってるよ……」

「だったら、もういいだろ。試すようなことするなよ」

「別に試してるわけじゃ……」
「じゃあ、ガキくさい態度はやめろ」
まただ、この偉そうな態度……ムカつく。
「……わかった。あたしも行く。大人だってこと、見せてやるわよ」
「その言葉、忘れんなよ」
ええ、忘れませんとも。物分りのいい大人の振りして、社交辞令のひとつでも言ってやるわよ。見てなさいよ、中津川慶太。すべての女子があんたにキャーキャー言うと思ったら大間違いなんだからね！！

7

「本当にありがとね」
何度目かわからないありがとうを、唐揚げを詰めながらお母さんが言った。あたしが愛梨ちゃんの運動会に行くなんて、１００％無いと思っていたのだろう。
正直、乗り気ってわけじゃないけど……でも、今日一日はあたし、ちゃんと立派な大人の態度で過ごすから。
……と心の中で誓ってから数時間も経たないうちに、あたしはとんでもないことをしでかしてしまうのだった。

こんなにちっちゃかったっけ……と思わず呟くくらい、幼稚園の運動場は狭かった。
あんなに小さい愛梨ちゃんも、ここでは年長さん、お姉ちゃんになる。っていっても、あたしと同じで、愛梨ちゃんはみんなをまとめるリーダー役からは程遠いらしい。どこか不安そうに目をきょろきょろさせながら、独りポツンと立っている。
先生に連れられて、愛梨ちゃんがかけっこのスタートラインに立つ。
「愛梨、頑張れ！！」
中津川慶太が大きな声でそう言うと、ここからでもわかるくらい、愛梨ちゃんの顔がパーッと明るくなった。笑うとほんと、可愛いんだよな。将来美人になるよ、あの子は。他の子たちと比べても、断然顔小さいし、脚長いし。色白だし、目大きいし、鼻筋通ってるし。お母さん、相当美人だったんだろうね。中津川慶太見てもわかるけどさ。
お母さんか……愛梨ちゃんは、お母さん、いないんだよね……。
周りを見ると、若いお母さんだらけだった。中には、そんなに若くないお母さんもいたけど。口々に、自分の子供の名前を呼んでい

る。別の場所には、ビデオカメラを構えたお父さんたちの集団が。その中には、愛梨ちゃんのお父さんもいる。あたしのお母さんは、ゴールに近い場所で応援しているみたい。

愛梨ちゃんが一生懸命走っている。おお、ダントツで一番じゃないか。可愛い上に運動神経も抜群なんて、ほんと、将来が羨ましい。

そのままぶっちぎりで、愛梨ちゃんは優勝した。嬉しそうに、お母さんのもとに走って行き、ギュッと抱きついた――あたしのお母さんなんだけど。

お母さんも嬉しそうに愛梨ちゃんを抱き締め、それから何かを語りかけ、何度も髪を撫でている……あたし、あんな風に抱き締められたこと、あったっけ……そりゃあ、あたし自身、あんな風に甘え上手な子じゃなかったけどさ。そもそも、運動会で一位取ったことなんてないし。いつも三位とか四位とか中途半端な位置で、誉められることも慰められる必要もなかったといえばなかったんだけど。

「にーに、あいり、いちばんだったー」

「すごいな、愛梨。かっこよかったぞー」

中津川慶太は、愛梨ちゃんを高く抱き上げた。愛梨ちゃんは、キャッキャ言って喜んでいる。

「お、おめでとう、愛梨ちゃん」

私も思いきって、精一杯の笑顔で言ってみた。愛里ちゃんは一瞬ビクンとしてから、「……ありがとう」と無表情で言った。うう、あたし、嫌われてる……。

それから愛梨ちゃんは玉入れに参加するためまたあたしたちのところを離れ、お昼になると戻ってきた。午後は、親も参加する障害物競走とダンスがあるらしい。

「わー、すごーい、いっぱいあるー」

お母さんの作ったお弁当を見て、愛梨ちゃんが手を叩いて喜んでいる。

「パパのおべんとうと、ぜんぜんちがうー」

愛梨ちゃんの言葉に、和やかな笑いが広がる。

愛梨ちゃんは、あたしのお母さんの膝の上に乗り、口をあんぐり開けた。お母さんはそこに、小さい唐揚げを入れてやった。
「おいしー！！」
「そう？　良かった。たくさんあるからね。次はおにぎり食べよっか？」
「うん！！」
あたしのお母さんと、愛梨ちゃんと、愛梨ちゃんのお父さん……どこから見ても、幸せそうな仲良し家族だ。
あたしの存在、忘れてない？　いや、それを言うなら中津川慶太もだけど。
「瑛ちゃん！！　慶太も。一緒に食べよう」
心の声が聞こえたわけではあるまいが、愛梨ちゃんのお父さんがあたしたちを呼んだ。愛梨ちゃんは慶太を見てニッコリと笑い、あたしの方を見て「チッ」という顔をした……ような気がした。
あたしは遠くを見ながら、黙々とお弁当を食べた。３人の仲良し家族は、中津川慶太を入れて４人になった。
こんなはずじゃなかったんだけどな……今日は、愛梨ちゃんとも、少しは仲良くなれると思ったのにな……。
ふいに、トントン、と肩を叩かれた。振り向くと、小さな男の子が立っていて、手の平に乗せた飴をあたしの方に差し出している。
「あげる……」
「……あたしに？」
男の子は、なんだかムッとしたような顔で、コクンと頷いた。
「あ、ありがとう……」
そう言って飴を取り笑うと、男の子は真っ赤な顔をして去って行った。近くで待っていたお母さんらしき人にしがみつくと、あたしの方を振り返り、嬉しそうに笑う。それはどう見ても、好意の笑顔だった。あたしも自然に笑顔になる。
「……ねえ、何かお菓子持ってない？」
中津川慶太はポケットの中から、チロルチョコを三つ取り出した。

「ひとつ、もらってもいい？　あ、お金は払うから」
「いらねーよ」
そう言って、手の平をあたしの方に差し出した。あたしはお礼を言ってひとつ取り、さっきの男の子を捜しに行った。
その子のお母さんがいる前で、さっきのお礼と言ってチョコをあげた。男の子は恥ずかしそうにお母さんの方を見てから、「ありがと」と小さな声で言ってチョコを受け取ってくれた。
「良かったねー、遼ちゃん。すみません、ありがとうございます。この子、キレイなお姉ちゃんに飴あげるんだ、って、きかなくて」
キレイ……って、あたしが！？　この子、こんなに若いのにド近眼なんだろうか……それとも、こんなに小さいうちからマニアな趣味なのだろうか……。
男の子の将来が心配になりながらも、子供に好かれて悪い気はしなかった。いいや、ものすごく嬉しかったし、こんなあたしでも好きになってくれる子供がいるのだと思うと、ほんの小さな自信にもなった。
すっかり上機嫌になって戻ると、ビニールシートの上には中津川慶太しかいなかった。
「あれ……みんなは？」
「愛梨がダンスの練習するって」
中津川慶太の指差す先を見ると、３人ではしゃいでいる姿があった。
「……あのさ、愛梨ちゃんって、あたしのこと、嫌ってる……？」
中津川慶太が、きょとんとした顔であたしを見上げた。あたしだって、なんでいきなりこんなこと訊いたのかわかんないわよ。しかも「うん」って言われたらめちゃめちゃへコむじゃない！！
「っていうか……怖がってる」
「怖いの！？　あたしのこと！？　なんで！？」
「……おれも、ちょっと怖い」
「は？」

とは言ってみたものの、確かに今までのこの人に対するあたしの態度を振り返ってみると、かなり怖い女かもしれないあたし……いろんな意味で。
もちろん、愛梨ちゃんにはそんな態度をとったつもりはないけど……でも、あたしのピリピリした気持ち、伝わっちゃってるのかもしれない……。
「……嫌いなのと、怖いの、どっちが消すの簡単かな……」
「……怖いのは、怖くないってわかりゃいいだけじゃね？」
「わかってくれるかな？」
「わかってもらいたいのか？」
「当たり前でしょーが！！」
「……その顔が怖い」
「う……じゃ、じゃあ、どうすればいいのよ？　具体的なアドバイスしてよ」
「うーん……無理に大人ぶらないことかな」
「は？　何それ。散々エラソーに“ガキ”扱いしてきたくせに」
「うん。だからそれでいいんじゃね？　子供はさ、嘘くさいのが一番嫌いなんだと思う。だからって、おれに噛み付くみたいに愛梨に噛み付いたら、ただじゃおかねーけどな」
何よ、みんなして愛梨愛梨って……なんて拗ねるところが、ガキって言われちゃうところなんだろうけど。
そうこうしているうちに、3人が戻ってくるのが見えた。
「あいりのこと、みててね、ママ！！」
あたしのお母さんと手を繋ぎながら愛梨ちゃんが言った……ママ？
ママ、と呼ばれたお母さんも、特にビックリした様子もなく、ごく自然に頷いている。
あたしの知らないところで、ずっとそうやって呼んで、ずっとそうやって呼ばれていたんだ……それはあんたのママじゃない、あたしのお母さんだ……！！
「……般若みたいになってんぞ、顔」

中津川慶太の声が聞こえた。だけど、笑顔を作る気分になんてなれない。あたしはギリギリと歯を噛み締めた。
「あんな小さな子供に嫉妬かよ……ほんとお前ってガ――」
言い終わる前に、あたしは中津川慶太の左頬を、思いっきり平手打ちしていた。不意打ちだったからか、中津川慶太の大きな身体は、シートの上に倒れてしまった。
手の平がジンジンする……あたし、人を叩いてしまった……生まれて初めて、人を、叩いてしまった……。
「……ってぇ……舌噛んじまっただろッ！！」
滝のような涙と鼻水を流し、しゃくりあげるあたしを見て、中津川慶太の顔から怒りの色がスッと消えた。
「……ごめ……ヒック……ごめ……なさ……ッ……」
「慶太。ちょっと来なさい」
中津川慶太のお父さんが、今まで見たこともないような怖い顔で言った。中津川慶太は素直に立ち上がり、左の頬を撫でながらついていく。
「ま……待ってくださいッ！！」
声が裏返って恥ずかしかったけど、今はそれどころじゃない。
「中津川慶太――先輩……先輩は、何も悪くないです！！　あたしが悪いんです！！　ほんとです！！　だから……」
「瑛ちゃん……」
「ごめんなさい……ごめんなさい！！　お騒がせして、本当にごめんなさい！！」
あたしは思いきり頭を下げ、文字通り逃げるように幼稚園から出て行った。
走って、走って、走って……これ以上走ったら心臓壊れちゃうってところまで走って、立ち止まって、周りを見てみたら、まるで見たこともない景色が広がっていた。
そもそも、幼稚園のある場所だって、まったく知らないところだったけど……。

何だか本当に、独りぼっちになってしまった気分になる……この広い世界で、あたしは独りぼっち……寂しくて、死んでしまいそう……。

大丈夫、ちゃんと帰るから……ゆっくり歩いて、頭冷やして、暗くなる前には家に帰るから……あたしだって、少しは大人になりたいもん……大人になれば、この苦しさも、なくなってくれるでしょ……？

「……ぶっちゃった……」

手の平を広げてみる。あたしの手はもう全然痛くないけど、中津川慶太のほっぺたは痛いだろうな……っていうか、舌噛んだとか言ってなかった？

「愛梨ちゃんだけじゃなくて、中津川慶太にも嫌われたな……確実に」

いや、元々嫌われてたか……考えてみれば、あたしみたいな妹ができるなんて、中津川慶太にとっては勘弁してほしい事態だよね……。ま、一緒に住むわけじゃないけどさ。

「あ……」

ストリートコートっていうのかな、コンクリートのバスケのコートがあるのが見えた。周りに家はないから、公共のスペースってことなのかな？

誰もいないのを確認して、あたしはボールを拾い上げ、ゴールに向かって投げてみた。

ボールはネットがぶら下がってる輪っかに当たって、とんでもない方向に飛んで行った。拾いに行って、もう一度投げてみる。今度は板に当たって戻ってきた。

それから何度も投げてみた。全然入らなくてイライラする。あたしはヤケクソになって、ボールをゴールに叩きつけ続けた。

「……入れる気ないだろ」

突然声がして振り向くと、中津川慶太が立っていた。いつからいたんだろう……あたしの手からボールを奪い取ると、完璧なフォー

ムでゴールに向かって投げる。ボールは輪っかに触れることなく、スポッとネットを通って落ちた。
そりゃあんたは何年も毎日練習してるんだから、上手いに決まってるじゃん……なんて嫌味を考えてる場合じゃない。
「あの……本当にごめんなさい」
改めてあたしは頭を下げた。本当に、心の底から、反省してます。
「もういいって……おれも、悪かった」
「え……？」
「お前がそんなに思い詰めてるとは思わなかったからさ……単なるワガママだと思ってた」
中津川慶太はボールを拾い、何度かドリブルすると、また華麗なるシュートを決めた。
「……おれだってさ、１００パー賛成ってわけでもないんだぜ？」
意外なことを、中津川慶太は口にした。
「親父には幸せになってほしいけど、母さ――お袋のこと、忘れたわけじゃないし」
別に無理してかっこつけて“お袋”なんて言わなくてもいいのに。っていうか、むしろジジくさくてかっこよくないよ？
「まだ、たったの四年しか経ってないしさ。おれにとっては、お袋だけが、世界中でただ一人の母親だし。誰も代わりにはなれないし、なってほしくもないし。他の人に夢中になってる親父を見るのは、正直複雑な気分だったりもする」
話しながら、中津川慶太は何度もボールを放り投げている。何を話していても、どこから投げても外さないのはさすがだ。
面と向かっては、話しにくいことなんだろうな……だからあたしも余計なことは言わず、ただ黙って耳を傾けることにした。
「……今でも時々、お袋の夢を見る。なんで死んじゃったんだろう、って思う。いてほしい。戻ってきてほしい……けど、戻ってくるわけねーじゃん？」
中津川慶太が、振り向いて笑った。悲しそうで、寂しそうで、優

しくて、あたしの胸がキュッと痛んだ。
「愛梨はさ、母親の記憶、ないから……あいつに、母親、作ってやりたくてさ……けど、お前の気持ち、全然考えてなかったよな、おれ」
キュッと痛んだ胸が、今度はじんわり熱くなる。なんだよ、急に優しくなりやがって……。
「……あたしも、お母さんの気持ち、全然考えてなかったよ……自分の寂しさとか、不安とか、そういうのでいっぱいでさ……」
中津川慶太が、胸の辺りで持ったボールをあたしの方に投げる素振りを見せた。
バスケのボールって、硬くて痛いから大っ嫌いなんだ。パス受け損なうと、爪の間から血が出るし。
だけど、あたしは中津川慶太と同じように、胸の前でボールを受ける形に手を作った。中津川慶太の手を離れたボールが、あたしの手の中に飛び込んでくる。やっぱり痛い。けど、なんか嬉しい。
「よーくゴールを見てみな。絶対に入る、絶対に入る、絶対に入る……心からそう念じて、集中するんだ」
絶対に入る、絶対に入る、絶対に入る……輪っかの中を見つめてそう念じ、あたしは大切にボールを投げた。ボールは何度か輪っかにぶつかって、ネットの中に落ちて行った。
「やった！！　入った！！」
「気持ちいいだろ？」
「うん！！　体育でも入ったことなかったのに！！」
思いきり笑って、はたと気づく。そういえば、中津川慶太の前でこんな風に笑ったことってなかった気がする。そう思うと、何だか照れくさい。だけどやっぱり、苛立ちをぶつけるより、よっぽど気分がいいや。
「……いろいろ、ごめんね……いや、ごめんなさい」
つい忘れちゃうけど、中津川慶太は先輩なんだよね。しかもふたつも。心の中とはいえ、呼び捨てにするのもやめた方がいいのかな

……。
「だからもういいって……それに、嫌いじゃなかった」
「え？」
「あんな風に、なりふり構わず自分の気持ちぶつけてくる女なんて初めてだったし。女の子が泣いてるのは見たことあったけど、鼻水まで流してんのは見たことなかったし」
「しょ、しょーがないじゃん！！」
「だから、いいよ、別に。今さら気取らなくたって。その方がおれも楽だし」
「……タメ口でもオッケーってこと？」
「んー……ちょっとムカつくけど、お前に敬語使われるのも不気味だからいいや」
「不気味って……あ、でも、学校では敬語使うから。っていうか、学校では話さないから」
「なんで？」
「なんでって、自覚ないわけ！？　あんたと仲良く話しなんてしてたら、後で呼び出されてボコボコにされちゃうって」
「話しただけでそれはないだろ。んなことといったら、今まで付き合った彼女たち、半殺しの目にあってたっておかしくないだろ」
「彼女……たち……」
あれ……？　なんだろう、このガッカリ感……なんだかものすごくテンション下がるんですけど……まさかそんなにショックなのあたし！？
「まあ、多少陰口叩かれたりってことはあったみたいだけど……ってか、お前、彼女じゃないし」
あたしの顔を見て、中津川慶太が噴き出しそうな顔になる。鼻の穴がヒクヒクしてる。うわー、ムカつく！！　そりゃああたしはあんたに釣り合うような美人じゃないわよ悪かったわね！！
「あ、あたしだって、あんたなんてお断りよ！！　女が誰でもあんたみたいのが好きだと思ったら大間違いなんだからね！！」

精一杯の強がりを返す。ほんとは……ほんとは、ちょっと、いいな、とか、思ってたり、するけど……ちょっとだけだけどね！！
「あ……愛梨ちゃんのダンスは？」
「ああ……予定では、あと三十分くらいで始まる」
中津川慶太が腕時計を見て言う。
「戻ってあげて」
「お前は……戻れないか」
「うん……ごめん……」
「気にすんな。愛梨も、お前がいると怖がるし」
「う……ねぇ、愛梨ちゃんと、仲良くなれると思う……？」
中津川慶太がフッと笑う。優しくて、キレイな微笑み。
「なれるさ……愛梨は優しいし、心が広いから」
「……なんか微妙な言い方だけど、そう言ってもらえて嬉しい」
「焦る必要はないし、無理する必要もない。おれももう、無理強いしないし」
「ありがと……あんたがいてくれてよかった」
「惚れるなよ？」
「だ、誰がッ！！」
……多分、もう、手遅れですけど……。
それから中津川慶太は幼稚園へと戻っていき、あたしは早々に家に着いた。
帰ってきたお母さんは、あたしが嫌なら再婚の話は考え直すと言った。だけどあたしは笑って首を振った。
自分でもほんとに不思議なんだけど、いつかちゃんと祝福できる日が来るような気がしたんだ。何時間か前までは、あんなに子供みたいに取り乱してたっていうのに。
そりゃあ、お母さんを取られちゃうような寂しさはあるし、家族の形が変わってしまう不安もある。だけど、お母さんの幸せを考えられる余裕が少しだけできたっていうのかな。
それはきっと、あたし自身が、恋というものを知ったから……い

つの間にか、あたしは恋をしていたんだ――初めての恋を。まだ生まれたばかりの、ちっちゃな卵みたいなものだろうけど。

8

3月、中津川慶太の卒業式の日、お母さんと中津川義之さんは、市役所に婚姻届を出した。あたしと中津川慶太は外で待ち、愛梨ちゃんはお母さんたちと一緒に窓口に行っていた。

あれからあたしたちは、何度もご飯を食べに行ったり、遊園地に行ったり、動物園や水族館に行ったり、スケートに行ったり……そうやって少しずつ心の距離を縮めて行って、愛梨ちゃんとも最初の頃とは比べ物にならないくらい仲良しになれた。

5人で出かけるのは、賑やかで楽しかった。もちろん、それ以上に、中津川慶太と一緒にいられることが楽しかったんだけど。

どこからかあたしたちの関係が漏れて、ヒロとシホには詰問まがいに根掘り葉掘り訊かれたし、知らない女子から思いっきり睨みつけられたりもしたし、知らないうちに鞄の中に呪いの手紙を入れられてたり、机の中にワラ人形が入ってたりもしたし、そうかと思うといきなり「友達になろう」なんて言ってくる子たちもいたし……だけどその程度で、呼び出されてリンチ、なんてことはなくてホッとしている。

「愛梨、お前の似顔絵、一所懸命練習してる」

「ほんと！？　見せてくれればいいのに」

「可愛く描けたらプレゼントするんだってさ」

「わー、楽しみー」

「モデルが可愛くないんだから無理だと思うけど」

「なに！？」

あたしが睨みつけると、中津川慶太は「冗談冗談」と言って笑った。

「……お姉ちゃんができて嬉しいってさ。本当はずっとお姉ちゃんがほしかったんだって。兄としては複雑な気分だ……」

「一緒に暮らし始めたら、すっかり本物の仲良し姉妹になっちゃう

かもね。にーにの入る余地なし！！　みたいな」
「そうならないように、頻繁に帰るさ」
やだ、嬉しすぎて顔がニヤけちゃう……。
寮があるのは新幹線を使えば一時間くらいの距離のところだけど、それでも毎日のよう会えていた今までと比べれば、とんでもなく遠いところに行ってしまう気がして、あたしの心は寂しさでいっぱいだったから。愛梨ちゃんのためだとしても、帰ってきてくれるのはほんとに嬉しい。
……帰ってきたら、やっぱり泊るんだよね……一つ屋根の下、過ごすんだよね……。
「どうした？　顔が真っ赤だぞ？」
「えっ！？　い、いや、あっ、暑いな～今日は」
「……寒いだろ」
訝しそうに、中津川慶太があたしを見る。
「お待たせ」
ナイスタイミングで、三人が戻ってきた。あたしと中津川慶太は「おめでとう」と声を揃えて言った。お母さんの幸せそうな顔を見て、心の底からそう言うことができた。
だって、一番好きな人に、一番好きになってもらうのって、奇跡みたいなことだから……今のあたしには、それがよくわかる。
そうしてあたしは、柴原瑛から、中津川瑛になった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2042k/

ファミリー

2010年10月8日14時10分発行